たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報　No.18　平成2年3月30日

No.287遺跡出土の緑釉陶器・土鈴・コップ形須恵器

No.287遺跡の名品あれこれ

出土遺物には多量に出土するものと、ごく稀にしかお目にかかれない珍らしいものとがあります。前者はその量の膨大さから報告書作成にあたって、時として調査者の悩みの種ともなりますが、後者は長い調査のなかで一服の清涼剤として調査者の目を楽しませてくれることがあります。

ここに紹介する3点は多摩ニュータウン遺跡群においては、出土例が極めて少なく、珍品と称することができるものです。右の緑釉陶器は、9世紀頃、現在の愛知県猿投山近傍で作られたものです。鉛を呈色剤として用いた釉薬の掛かった焼物で、器面が薄い緑色をしています。中央の土鈴は、馬につける鈴のミニチュア製品と考えられ10世紀頃の住居跡から出土しました。左のコップ形須恵器は、現代のぐい飲みをひと回り大きくしたもので、おもわず、自分の口もとに運びたくなるような誘惑にかられる代物です。

（内野　正）

遺跡だより⑰

―多摩ニュータウンNo.287遺跡―

第21号住居跡内遺物出土状況

今回紹介するNo.287遺跡は、八王子市松木に所在し、本誌No.15、No.17で紹介のあったNo.107A・B遺跡の南隣に位置しています。遺跡は主として東へ向かった緩斜面上に立地し、分布調査によって古代集落の存在が予想されていました。今年度は隣接するNo.288・289遺跡も合わせて約一万㎡を調査しました。

調査の結果、遺構については縄文時代の土坑（陥穴）・集石・平安時代の住居跡・円形土坑・近世の屋敷跡・土坑・溝・井戸等が検出されました。調査当初に予想されていた平安時代の住居跡は総数21軒検出され、それらは出土遺物から9世紀から11世紀初頭にかけて作られたことが判りました。また、住居跡のなかには、カマドを作り変えているもの、貯蔵穴を備えているもの、火災にあったと考えられるものなどがあり、他にも様々な所見が得られました。平安時代の所産と考えられる円形土坑も10数基検出されましたが、その大半が住居跡の分布とは重複せず、遺跡東端、縁辺部から検出されました。土坑内からも土器が出土しており、土坑の掘られた時代、用途を研究する上で貴重な資料になると考えられます。遺物は縄文時代については前期から中期頃にかけての土器が少量出土したほかに、針状の骨角器が1点検出されています。遺構は検出されませんでしたが、弥生土器も少量見つかっております。

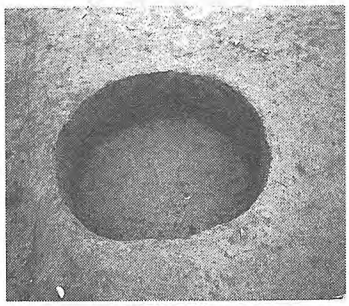
今回の調査で、最も出土量が多かったのは、やはり平安時代の土師器や須恵器を主とする土器類です。特に住居跡内からは、ほぼ完形に近い状況でまとまって出土したものもあります。

土器類の中には、表紙で紹介した緑釉陶器・土鈴・コップ状須恵器など、多摩ニュータウン遺跡群内では珍らしい出土遺物も含まれています。土器類以外では、小刀などの鉄製品や砥石・紡乗車などの石製品も出土しています。

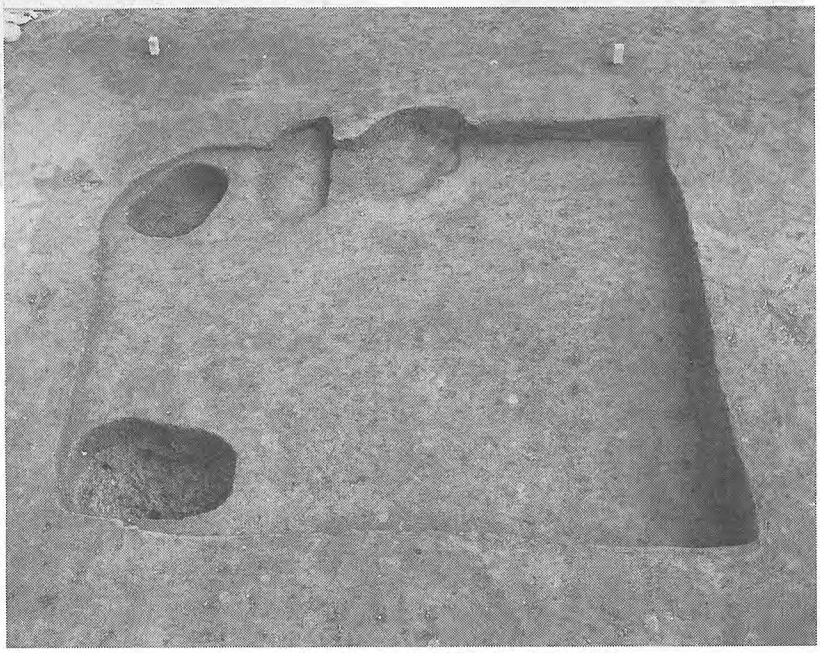
近世の遺物も比較的豊富でした。特に遺跡北側斜面からはゴミ捨て場が見つかり、幕末から明治にいたる大量の陶磁器が出土しました。その出土量は、この場所のかつての住人の経済力の大きさを物語っているようです。

今回の調査区域の南側には、中世に勢力をふるった小田氏の屋敷跡が推定される場所があり、平成二年度に調査を予定しています。今後の大きな成果を期待されています。（内野　正）

カマド検出状況（21号住居跡）



円形土坑



貯蔵穴をもつ住居跡（８号住居跡）

遺跡だより⑱

―多摩ニュータウンNo.339遺跡―

古代の溝　（部分）

今回は、町田市小山町のNo.339遺物で出土した遺構・遺物のうち、古代の木器を大量に出土した溝を紹介します。

この溝は、境川に注ぐ小河川の西側肩部を掘削してつくられていました。

溝は0.5～1mの幅で、総延長約130mを調査しましたが、始まりと終りの箇所は今回の調査区からは外れており確認することはできませんでした。溝の中には、部分的に杭で囲がつくられていてその中から木器類が出土しています。また、近くからは簡単な堰も検出されていて、川水をせき止めて水位を調節していたことも判明しました。

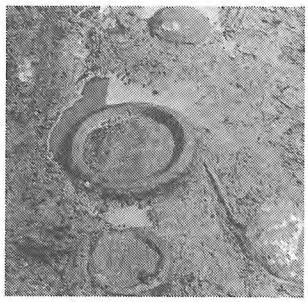
本遺構からは、加工途中の木器の未製品が多く出土しており、これら未製品の皿や鉢が重なった状態で出土した場所もありました。このような木器の出土状態から、本遺跡では木の性質を安定させる目的で水漬けにしていたものが、何らかの理由で放置され、偶然残ったものと推察されます。また、この施設とは別に、溝の中に木の切り株や丸太材、加工木を沈めて、流れをせき止め、その間に木器を貯めていた場所も認められました。

溝は8世紀の前半頃（奈良時代）につくられ、10世紀の始め頃まで使われていましたが、その後、一気に埋まってしまったようです。このことは溝の堆積層や出土した土器の年代から推察されますが、木器の製作は、この溝が使われていた8世紀末～9世紀前半と9世紀後半から10世紀初めの大きく二時期に分けられるようです。

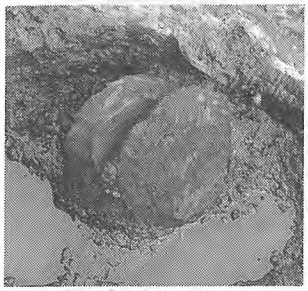
木器類は約200点出土しており、そのうちの大半は木を削った跡を明瞭にとどめる未製品で、完成品は少数です。製品には皿・鉢の他に長方形盤・漆器皿・曲物・農具（スキ身・柄）・火きり臼・建築材などがあります。また、木器をロクロで挽いた時にできる独楽状の木製品が出土していますので、近くに作業場跡の存在も想定されます。

他に木器を荒削りするのにいた鉄製の手斧も出土しました。この手斧の刃の幅と、木器の未製品に残る刃の幅が一致することも確認されています。木器とともに土器も大量に出土しており、須恵器（坏・蓋・横瓶・甕）や、土師器（坏・盤状坏・甕・土錘）があります。土器には墨で「門」「北」「乙」「井」などの字を書いたものも見つかっています。整理作業が進めば、墨書土器はさらに増えるものと思われます。また、「門」という字は木製皿に刻書されたものがあり、両者の関係が注目されます。

今後、出土した木器類の分折が進めば、木器の製作技術や製作工程が明らかになるものと思われます。さらに本紙No.17で紹介されたNo.107B遺跡のものとの比較検討が行なわれれば、古代の木器生産の様相がかなり明らかになるものと期待されています。（飯塚武司）



皿未製品出土状態



皿未製品出土状態

長方形盤出土状態

鉢類未製品出土状態

杭の検出状態

遺跡だより⑲

―多摩ニュータウンNo.107A遺跡―

今回は、昭和63年10月から平成元年12月まで調査した八王子市松木に所在するNo.107A遺跡の縄文時代中期後半に属する環状墓壙群を紹介します。

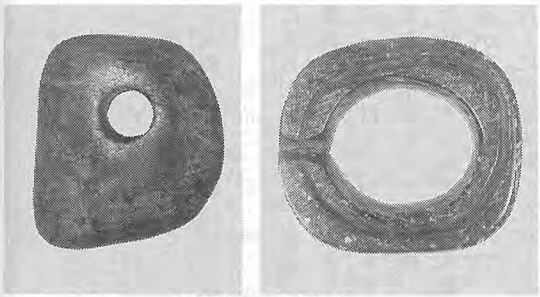
本遺跡は、本紙No.15で、すでに概要を紹介しましたが、このときは中世末期の戦国大名後北条氏の重臣大石氏屋敷跡に関する話題が主でした。その後調査が進むにつれて、奈良時代後半から平安時代初頭にかけての大型の建物跡（約8棟以上）を伴う集落の跡や縄文時代中期後半の大規模な集落が検出され、多摩ニュータウン地域でも屈指の大遺跡であることが判明しました。特に古代の集落では、本紙前号で紹介しましたNo.107B遺跡において多量の同時期の木器が出土しており、整理・研究が進展すれば、注目すべき成果が得られることと思います。

今回紹介するのは、縄文時代中期後半頃、台地上の縁辺部にそってまるく並んでいた竪穴住居跡群の中央の空間に、これまた環状に巡っている土壙墓群についてです。墓は、いずれも赤土に掘り込まれており、平均的な大きさは径1m前後の円形で、深さは現存で40～80cmあります。

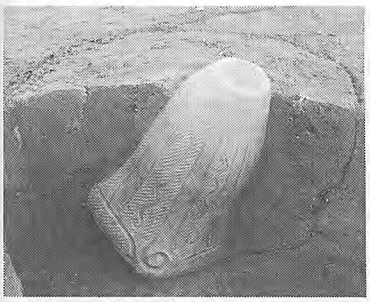
こうした土壙墓が、約220基ほど環状に分布し、その周囲を巡る集落の共同墓地となっていたと考えられます。墓の中からは、何も出土しないものも多くありますが、伏せた状態の完形の深鉢形土器が見つかることも多く、稀には、ヒスイ・蛇紋岩・滑石製の垂飾品（ペンダント類）や石棒などが発見されました。土器は〝骨壺〟として使われた可能性もありますが、ペンダント類と同様に副葬品として埋められたものもあったことでしょう。

縄文時代の集落とそれに伴う共同墓地が全体としてまとまって調査された例は比較的珍しく、集落と墓との相関関係の分析が進めば、縄文社会の構造という考古学が割合不得意な方面の研究にもかなり接近することが可能となることでしょう。

（佐藤宏之）



墓壙出土の垂飾品



墓壙内の土器

墓壙内の副葬品

墓壙群の分布

文化財講座〈14〉

縄文時代と人々 (2)

「注口土器」

縄文土器にはそれぞれの用途によって様々な形があります。その中に「注口土器」と呼ばれる注ぎ口がついた土器が知られています。縄文時代中期の終り頃から普及しはじめ、後～晩期に数多くつくられました。中期のものは瓢箪形をしており、後・晩期のものは現在私達が使っている土瓶や急須の形をしています。

注口土器はその多くが丁寧に作らています。薄手でよく磨かれており、しばしばベンガラなどの赤い顔料で塗られていることがあります。他の用途の土器（深鉢・浅鉢）と比べるとその違いがよくわかります。また、当時の集落の中でも一軒の住居ごとではなく、持っている家と持たない家があるようです。これらのことから注口土器は、日常生活に使っていた容器ではなく、何か特別な用途があったものと推定されます。

では実際にどのように使われたのでしょうか。まず考えられるのは注ぎ口がついていることから、中味は液体であろうということは想定できます。そして日常に使われない容器だということから特別なもの、大切なものを中に入れていたといえます。現在、考古学者の中で考えられているのは「酒」ではないだろうかということです。現在の私達が目にする酒で、たとえば果実酒でしょう。いろいろな木の実を発酵させたものといわれています。あるいは「動物の血」をいれた場合もあると考えられます。

酒の場合ですと、祭りや儀式の時に神や精霊に捧げたあとで、さらに皆でまわし飲みしたのでしょう。酔うほどに神の声を聞き、神がのり移ったりする神秘的な液体であったと思われます。動物の血の場合は、イノシシ・クマなどの血を入れて狩猟に従事した男たちが共に飲むことにより、その霊力が人間にも宿ると信じたからと考えられます。

注口土器はこのように祭り・儀式の際に特別な器として、特別なもの（酒・血）を入れて使用したと思われますが、縄文時代の終りとともに姿を消し、弥生時代には作られなくなります。

縄文時代は採集・狩猟を中心とした社会、弥生時代は農耕社会といわれています。注口土器の存在の有無は、この社会構造の違いからくる祭り・儀式の違いに原因があるかもしれません。

縄文人たちが行なう祭り・儀式に深く係わる器として使われていた注口土器は、弥生時代へと移行していく中で、弥生人たちにとってもはや存在意義がなくなってしまったのでしょうか。

（丹野雅人）

展示室の展示替について

当施設は開所以来6年目を迎えました。その間、毎年一度の展示替えを行ってきています。今年の展示替え作業は2月19～28日までの閉館中に行ない、3月1日に開館しました。

展示ホール入口

展示内容は、昭和62年12月から平成元年7月まで発掘調査され、縄文時代中期の住居跡が約130軒発見された八王子市堀之内のNo.72遺跡の調査成果の一端を紹介する目的で、「―5000年前の風景―」としました。

展示会場は、約5万年前の旧石器時代の遺物から近・現代にいたる通史や、No.72遺跡を中心とした縄文時代中期の用途別・文様別の土器・装飾品・墓（伏せ甕）などの遺物や当時の人々が食料を得るためにおこなった植物採集・漁撈・狩猟などが展示してあります。

エントラスホールは、速報を中心に展示しています。No.107B遺跡で出土した墨書土器（坏類）や文字が焼印してある木器（皿・椀）などを複製品をまじえて展示してあります。また、No.448遺跡で調査された須恵器の窯跡の出土資料などを展示してあります。

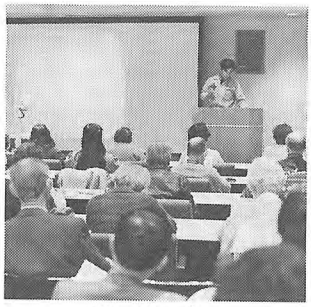
展示ホール展示風景

新しい展示模型は、「江戸のなりたち」です。江戸城以前の景観と江戸時代後期の町なみから、江戸の町の変遷をわかりやすく説明しています。

講演と映画の会

十二月二日、青山学院大学の江上幹幸氏による講演「東インドネシアの集落」が当センター会議室で開かれました。当日は64名の参加者がありました。

三月三日、当センター主任調査研究員千葉基次による講演「東アジアにおける新石器時代」と、映画「最後の旧石器人―ソカイ―」を上映する会が当センター会議室で開催されました。当日は104名の参加者がありました。



講演会

平成元年度の安全衛生行事

一月二十六日　多摩消防署の協力により、文化財防火デーにあわせて自衛消防訓練を実施しました。当日は自衛消防隊による初期消火訓練と、館内にいる全員の避難訓練を実施しました。

消防訓練

平成二年一月三十・三十一日　中災防の小池　熙安全管理士により遺跡現場及び整理場の安全診断を実施しました。

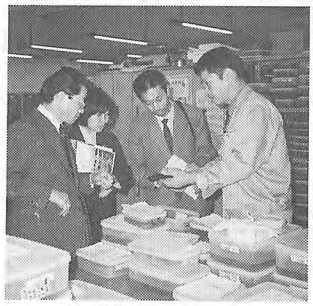
外国人研究者の来所

平成元年十一月二十一日　中国社会科学院考古学研究所の任・式楠（シーナン）氏が来所。施設見学の後、任氏には「中国新石器時代の玉器について」というテーマで講演を行いました。

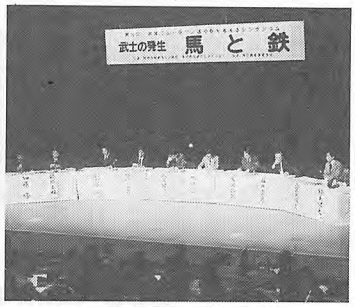
平成二年三月一日　西ドイツマーブルグ大学教授オットーヘルマン・フライ氏が来所されました。

第3回多摩ニュータウン遺跡群を考えるシンポジウム

二月三日　「武士の発生―鉄と馬―」をテーマとしたシンポジウムを「パルテノン多摩」小ホールで開催しました。



（中国）任　式楠氏



シンポジウム発表会場

当センターからは調査研究員の鶴間正昭・飯塚武司が「多摩丘陵の遺跡群」、松崎元樹が「多摩丘陵の鉄生産と鉄器」について、東京都教育庁文化課学芸員福田健司氏が「落川遺跡」について、それぞれ報告を行ないました。午後は群馬県文化財調査センター坂口　一氏の「群馬・赤城山麓の遺跡群」、大阪府教育委員会広瀬和雄氏の「中世領主の居館の成立」、国立歴史民俗博物館福田豊彦氏の「将門にみる武士の構造」、東京国立博物館小笠原信夫氏の「古代刀剣と鉄」、日本中央競馬会鈴木健夫氏の「日本古代馬の探究」についての報告がありました。参加者は235名でした。

東京都遺跡調査・研究発表会15

平成二年二月二十五日　練馬区公民館で東京都内の遺跡調査研究発表会が開催されました。当センターからは調査研究員の竹花宏之が「多摩ニュータウンNo.107遺跡」の発表を行ない、石崎俊哉が「多摩ニュータウンNo.211遺跡」の誌上発表をおこないました。

あとがき

▼平成元年度は、春の日本考古学協会総会の開催に始まり、各種講演会、縄文土器作り教室、世界各地からの研究者の来所などいろいろな出来事がありました。

遺跡の発掘調査では、縄文時代のものとしては、中期の大集落や墓壙群調査があり、弥生時代のものとしては、中期の住居跡の調査がありました。古代から中世にかけては、低湿地遺跡の調査で大量の木器類が出土しました。また、中世の山城の調査など、いずれも今後の研究において重要な資料が得られています。

今後とも当センターに対し、相も変わらぬご支援・ご協力をお願いします。（朝）

発行
㈶東京都教育文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市落合
1－14－2
☎ 0423-73-5296
0423-74-8044
平成2年3月30日